

清水恵さんを悼む

安井 亮平

最後に清水さんに会ったのは、4 月末私の家近くの川越の病院であった。そこで清水さんは半月ほど前から治療を受けていた。東洋医学を取り入れたガン治療で知られる病院である。

清水さんは、さすがに 1 月以来の厳しい闘病生活で一回り小さくなっていたものの、恐れていたほどでなく、一安心した。私と家人を認めた清水さんの表情は、12 月初めに研究会で会った時そのままの明るさで、かえってとまどいを感じたほどであった。

「何で私が、この私が病気になったのか、どうしても納得できない」と、しきりに嘆いていたが、それでもいつもの清水さんらしく、私たちの研究会やら、編集同人をしている函館の『挑水』誌やら、函館の共通の友人やら、これからぜひやりたい事やら、あれこれこちらの目をまっすぐ見て、率直な話しぶりだった。



実は、そのしばらく前に私たちは、モスクワの友人親子と函館を訪ねてきたところであった。友人は文化財保護を業としているので、3 度目の来日の今回は、函館の旧市街の保存の状況を見せ、それにぜひとも函館近辺に住む最良の人々に会わせたいと、計画を立てた。むろん最良の人の中に清水さん夫妻も入っている。4 月に訪ねる予定を病床の清水さんに知らせると、折返し、「……今は〈病気〉になじんできたというところでしょうか。……4 月においでになるとのこと、とても楽しみです。ぜひお目にかかりたく存じます。」(3 月 1 日付)との葉書をもらっていたが、残念なことに、私たちと行き違いに川越の病院に入院したのであった。

清水さんの同僚の方に聞いてもらった歓迎会の写真を見せると、清水さんは「私がいけない。ここにいるべきなのに」と思わずつぶやいた。清水さんこそその会の中心にいるべきなのに、清水さんがいれば会はずっと充実したのとは、出席者共通の思いでもあった。駒ヶ岳を背景に大沼でとった写真には、「そうなんだ。私はこんなにも美しい所に住んでいたんだ」と、吐息をついた。望郷の思いが痛ましかった。

程なく清水さんは予定よりも数日早く函館に帰った。2 度目に見舞った時は、足ならしをしていたとのことで病院の玄関でばったり会ったほどだが、やはり病状は進行していたのだろう、帰郷の旅は厳しかった。寝台タクシーで飛行機に横付けし、函館でも空港から直接入院したのだった。

函館に戻って 1 週間後の長文の手紙(5 月 9 日付)には、「……飛行機から桜が満開の五稜郭公園を見ることができ、故郷にもどってきたうれしさも倍増しました。」ついで、「私も目標を持とうと思い、夫にパソコンをたたいてもらい口述筆記で、短い文章ですが、書きたかったテーマを 2、3 選んで、挑戦し始めました。うまくいきましたら、『異郷』か当地の研究会の会報に投稿しようと思います……」いつもの力強く大きな字であった。

それからの 5 か月余り、日々進行し続ける病状、心の底にたまった不安や絶望感や焦燥、加えて 15 年ぶりの異常な暑さと、実に変なことがあったろう。死と向き合う毎日は、いかに辛かったことだろう。

しかし、その中で驚くべきことに、清水さんは6篇もの文章を書き上げたのである。しかもその文章がどれもすばらしい。

清水さんの気力と意志の勁さに驚かすにはいられない。清水さんを最後まで自宅で献身的に支え続けた家族や友人の皆さんもまた偉かった。ただただ頭が下がる。

6篇の文章は、それぞれ清水さんの死と病との苦闘と和睦の里程標となっている。清水さんの何よりの生の証である。

あるいは、川越そしてその前の愛知県の病院での治療体験の後、清水さんは、自らの直面せざるを得ない状況について、ある踏ん切りがついたのだろうか。病状をありのまま認め受入れる覚悟がついたのだろうか。『挑水』第2号(2004年7月21日発行)にのった「函館に住む私と〈日口交流史研究〉」で、清水さんは、「研究者としてのこれまでの自分について」冷静に決算を試みている。この作業を通じて、確かに、清水さんはこれまでの歩みを総括し今後の課題を明確にしたと、いえるだろう。目は自身にとどまらず、函館の現状と課題についても向けられている。

それを受けた「最後の〈低い緑の家〉——サファイロフの晩年——」(函館日口交流史研究会『会報』第26号、2004年9月10日発行)は、正に好エッセイである。ペトログラードに家族がありながら革命のため日本に留まったサファイロフは、やがて日本人と結婚し日本に帰化するが、1960年1月交通事故により函館に骨を埋めた。94歳だった。その数奇な生涯が愛情のこもった筆致で余す所なく描かれる。文章がまた見事である。ゆったりとしていて、澄み切っている。

『挑水』第2号の「末尾から」の文章もすばらしい。それは、正しく郷土と自然と夫への讃歌である。

この2篇の文章は、清水さんが病と死との苦闘の末、ある精神の高みに達したことを物語っているように、私には思える。

ついで再び清水さんが踏み出した「一步」が、「補遺——1877年、瀬棚沖におけるロシア軍艦〈アレウト号〉の遭難をめぐる」(函館日口交流史研究会『会報』第27号、2004年10月8日発行)であり、また「幕末のロシア語通訳、合田光正のその後」(『異郷』第20号、2004年11月5日発行)であろう。前者は、今後も歴史研究者として歩むとの決意表明であるし、後者は、不当に忘れられた「名も無き人びと」(「〈尼港事件〉と殉難碑、そして函館」『挑水』第1号、2003年11月1日発行)を後世の記憶に止めることを自分の研究課題とするとの態度表明である。

8月3日付の葉書には、「……友人に手伝ってもらい、できれば『異郷に生きる』Ⅲに寄稿できればと論文をまとめているところです……」とあるが、それが遺稿となった「第二次世界大戦期の白系ロシア人の動向——内務省警保局刊行物を資料として——」なのだろう。この3月に刊行されるのが待ち遠しい。

私が最後にもらった絵葉書は、8月27日付。字はいつもと変わらないけれども、そこには「……病状は少しずつ進行しています。気力をふりしぼって、心の平安を保とうと努力しています……」とあった。あくまでも気丈な清水さんらしい。

清水さんは10月15日に亡くなった。享年45歳。奇しくも二葉亭四迷と同年であった。

45年とは余りにも短かった。心優しい清水さんは、人一倍後に残す家族を思って、心残りだったことだろう。無類の知友たちとの別れも辛かったことだろう。これから続々と「研究者冥利に尽きる」(『異郷』第20号の上掲論文)のような仕事をしたかっただろう。

後に残された私たちもまた寂しい。